

2019年12月29日(日)／説教者：名護良健

説教：「神と共に働く者」

聖書：コリントの信徒への手紙一3:6～9

招詞の詩編によると、地上の有様を見て嘆くことから始まる。国々、民族、支配者が主語となり、神に逆らう状況への嘆きから始まる。全世界がそうなっているから。そこで天にいます主は笑う。そこで「求めよ主の支配を」と言う。そこから今朝の聖書は、世のすべての指導者に向かい、神の創造によるすべての被造物を神の御心に従い育てよ、と言う。教会の指導者も例外ではない。牧師も然り。神の意志に従うように育てるわけです。牧師の意志ではないのです。わたしたちの生存は神の意志によるのですから。生命とはそういうものです。すべての被造物の生存とはそういうものです。指導者とはそういうものです。国々、民族、世界とはそういうものです。

ゆえにこそ生命は価値高き存在なのです。汚辱に委ねてはならないのです。私たちが生存によびだしたのは神、キリストであります。このことは単なる人道主義的な理解ではありません。ゆえにこそ神と人に仕えて価値高きに従事しなくてはならないのです。牧師の働きとはそういうものです。私もその一人としてこの60年働いて来たのです。書斎で日々祈り、学びました。

指導者の働きとは何でしょうか。単なる職業ではありません。広く世界に福音を広めるために、地の塩、世の光となるように励むのです。これが指導者の役割を果たすことになるのです。今朝は牧師職60年の反省も含めてお話したのです。

終わりに、2人の先人の言葉を紹介します。1.バルトの言葉=神の働きには中心と周辺がある。中心とは神の民イスラエル、周辺とは全世界にわたる維持と保持である。2.恩師木村文太郎牧師のことは=人間が神と共に働く姿は光栄であるか、働きの限界を知り、神と共に働くのが指導者の精神である。そのことをわきまえたいものである。(名護良健)